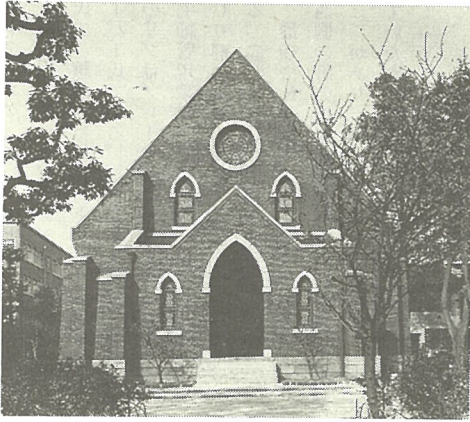


同志社礼拝堂の修理を終えて

奥野裕樹



昨年九月に修理を終えて、礼拝堂は再び堂々とした姿を見せ、工事を担当した一人として少し肩の荷が降りたところである。今回の修理には前任の中尾技師の異動に伴い昭和六四年一月から着任し、工事後半を担当した。その中で判明したことを、幾つか記述したい。

まず最初は、礼拝堂にはトラスの補強などに多くの六角ボルトが使用されているが、一部錆び落としをしていると『GLASGOW』の刻印（写真一）が見つかりイギリス製であることが判明した。ただトラス中央の＊の型の金物（漢字の「一」四の合番付あり）とボルトの八角の座は日本製のように、当時、日本で製作出来なかったボルトは輸入したと

思われる。文化財で同様の刻印のあるものは、上野の旧東京音楽学校奏楽堂（明治二十三年建立 設計 山口半六 久留正道、少し違うが同じような王冠マークのある福島県の旧伊達郡役所（明治一六年建立 WELLLINGTON）などがある。

次に、礼拝堂の屋根は昭和四四年に全面葺替えられているが、当初の屋根の鉄板が箱に入れて保管されていた。それにはPATD. APR. 4. 1882の刻印（写真二）があり、礼拝堂の建立される前に意匠登録されていたことが判明した。更に調査しているとアメリカ製であることが確認できた。（調査協力 浅村特許事務所 松村博氏）

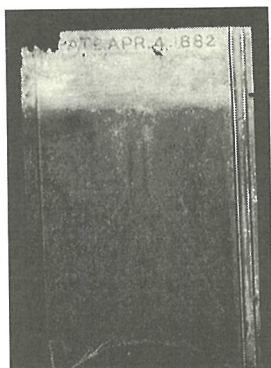
登録番号 2560
83 品名はメタル

（写真 一）



ルーフィング プレートといい、発案者はテネシー州ナッシュビルのジョン・ウォルター氏で、譲渡人は彼自身とチャールズ・B・クーパー氏である。説明文によると、重なり部のリップはプレート間に隙間を作る事により、毛細管現象による雨漏りを防ぎ、逆Y型とやじり形の押型により二枚で矢の形をしている。(詳しくは文末の原文参照)

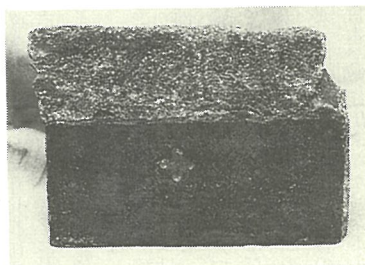
最後に礼拝堂に使用されていた煉瓦だが、西側の軒先の異形煉瓦に『X』の刻印(写真三)があり、当初は、岸煉で焼かれたと考えていたが、刻印のあるものは上端がはつられていて、当初の成型されたものとは違っていて、どうも後補のようである。(岸煉とは明治五年に、岸和田藩家老山岡伊万と岸和田町の有力者寺田甚与茂等の同志が、失業者救済の



(写真二)



(写真四)



(写真三)

為に丸窯三基を築き煉瓦を製造し、その後一旦途絶えるが明治二〇年七月に第一煉瓦製造会社を創立し、その後、明治二六年に岸和田煉瓦株式会社と改称した煉瓦会社の事である。)その後、東側軒蛇腹下の煉瓦に『京都大仏田中□□□』の刻印(写真四)があるのが判明した。クラーク記念館の付指定の設計図書に、工事に従事した業者の名前が書かれているが、その中に 下京区大仏瓦町五番戸 屋根瓦方 田中卯兵衛 とあり(ハリス理化学館の棟札にも名前が見られる)この人と煉瓦の刻印の人が同一人ではないかと考えられる。チャペルの施工者である三上吉兵衛氏(この事に関しては時報八五号で中尾技師が報告)は宮大工であるから、当然出入りの業者があつたと思われる、その中の瓦屋の田中卯兵衛氏に、同じ焼物ということで煉瓦を焼かせたと推測できると思う。このように礼拝堂は色々なことを私達に教えてくれるが、しかしまだ不明な事もたくさんある。それはまた今後の研究にお願いするとして、明治の人々のメッセージをつめた礼拝堂が永く愛され続けることを祈るものである。

(京都府文化財保護課技師)

資 料

256, 083 METAL ROOFING-PLATE. John Walter, Nashvill, Tenn., assignor to himself and Charles B. Cooper same place. Filed Dec. 29, 1881. (NO model.)

Brief.—The peculiar-shaped corrugations direct the water to the lower sides of the plates and a transverse seam is formed by lapping the plates, leaving a space between them to prevent capillary attraction. The side edges of the plates are made so that when joined they form a covered gutter.

Claim-1. The combination of two sheet-metal roofing-plates adapted to be arranged with other similar plates in horizontal overlapping layers, and formed at their lapping horizontal edges substantially as shown, to constitute a transverse anti-capillary seam, and provided with central longitudinal corrugations fitting one upon the other across the transverse seam at right angles, and formed to divert the water and direct it toward the side edges of the plate, substantially as shown and described.

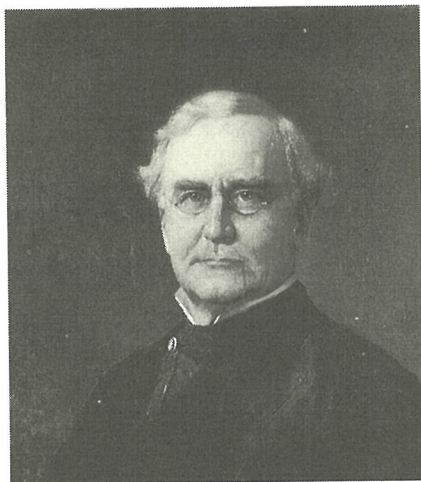
2. A sheet-metal roofing-plate having one of its lateral edges formed with two parallel corrugations to form a gutter, and the other lateral edge formed with a broad corrugation adapted to make a seam with corrugations and a cap for the gutter of a corresponding plate, substantially as shown and described.

3. A sheet-metal roofing-plate having a gutter formed by corrugations at one side and a perforated flange at the side of the gutter, whereby it shall be nailed to the roof of a house, and a broad corrugation at the other side adapted to form a seam with the adjacent edge of a corresponding plate, substantially as shown and described.

4. The combination of two sheet-metal roofing-plates, each having corrugations shaped like an inverted Y and an arrow-head, and so arranged that the arrow-head corrugation of one plate shall form a continuation of the Y-shaped corrugation of the other, substantially as shown and described.

同志社ハリス理化学学校と新島襄の夢

末光力作



ハリス氏の肖像画（明治25年4月6日米国より到着）

同志社ハリス理化学学校は一八九〇（明治二三）年九月二九日開校し、翌年四月七日に開校式を挙げている。従って昨年は同志社ハリス理化学学校開校百年の記念すべき年であった。周知のように同志社では「新島講座」の名で毎年世界的に著名な学者を講師として招聘して学術講演会が催されているが、昨年の「新島講座」では十一月一日と二日の両日、ハリス理化学学校開校百年を記念して日本人として三人目のノーベル物理学受賞者、江崎玲於奈が招かれ講演を聴く機会が与えられた。江崎は若き日に

同志社中学に学び、現在のハリス理化学館は彼が初めて物理、化学を学んだ場所であり、初日、「私の研究遍歴―量子電子デバイス」の題で講演会が行われた同志社チャペルは彼が中学時代、毎日礼拝をまもった思い出多い場所である。

二日目、栄光館で行われた「サイエンスの進歩が意味するもの」と題する講演の中で、江崎は「私は新島襄を尊敬する。その理由は新島が当時の幕藩体制下で支配的であった種々な固定観念に疑問を感じ、これと対決し、乗り越える努力を払ったことである」と述べている。確に新島の生涯は、脱国といい、帰国後のキリスト教主義学校の設立といい、すべて従来の固定観念への挑戦の日々であったと言つてよからう。さて、一九五七（昭和三二）年に発表され江崎の受賞対象となった「トネルダイオードの電流―電圧特性に関する研究」は特に当時の物理学の常識、固定観念を打破する理論であった。この論文はアメリカの一流物理学雑誌「フィジカル・レビュー」に掲載されたが、聞くところによるとこの論文は余りにも型破りの論文であったため日本では受理されなかったとのことである。その

後江崎の理論は「トンネル効果」として、またトンネルダイオードは江崎の名を冠した「エザキダイオード」として知られるようになった。以上のことを思い合わせると、江崎の新島観は自分の研究生活の経験から噴出した実感であり、筆者にはまことに印象的であった。そして江崎は同志社中学で教えられた新島の生涯に思いを至し、自分自身の中に「裏の子」を自覚している様に見受けられ、甚だ愉快に感じたのである。

新島は確に時代の先覚者であった。先覚者新島を考えると、筆者はやはり彼の自然科学尊重を挙げたい。土農工商といった身分制度の固定観念が未だ牢固として人々の頭から消えていない明治初年、新島は既に大学の理工学部構想や科学救国の思想を持っていた。これは他に余り例を見ないことである。工という字は「たくみ」と訓じるが、大工という言葉でもわかるように物を作ることの総称である。従って工学は物を創造する学問と言うことができる。物を作ることにはギリシャ、ローマの昔から奴隷の仕事であり、貴族は彼等の労働の上に胡座をかいて生活していたし、日本に於ても長い間賤しい階級の人の業であ

ると考えられていた。一八七五（明治八）年、同志社英学校が創設されたが、当時の開講カリキュラムを見ると、驚くべきことに数学を含めて約半数が自然科学に関するものであった。これは新島が受けたアモスト大学のリベラルアーツの教育が導入されたことと、新島に協力した山本覚馬は京都府顧問として京都舎密局（今の工業試験場）、牧畜場、織殿などを設立して京都の近代化に貢献した人であり、もう一人の協力者デイヴィスは南北戦争のときの軍人でもあり、共に自然科学に大きな関心を持っていたからである。日本の私学のほとんどが官吏養成のための法律学校として出発していることを考えると、自然科学を重視した同志社英学校は特殊な存在であったと言えるであろう。

ここで比較のため他の私学の自然科学分野についても少し触れておこう。日本を代表する私学として誰しもが挙げる大学は福沢諭吉の創立した慶応義塾大学と大隅重信による早稲田大学であろう。先づ慶応であるが、医学部が開設されたのが一九一七（大正六）年、今を時めく慶応病院が開院したのが二年後の一九一九（大正八）年のことである。慶応の

工学部は最初藤原銀次郎氏の寄附金八百万円を資金として藤原工業大学の名で一九三九（昭和一四）年出発し、一九四四（昭和一九）年慶応大学工学部となっている。一方早稲田であるが、一八八二（明治一五）年東京専門学校として創立された。当時、政治経済、法律、英語、理学の四学科があったが、理学のあったことは大隅の卓見であったと評価したい。一九〇九（明治四二）年に理工科が設立され、一九二〇（大正九）年に大学令により大学として認可されている。

日本に於ける自然科学の研究と教育の歩みを顧みると、その大部分が官立大学や官立研究所に於て行われてきた。理由は実験を伴う実験科学の領域ではどうしても多額の経費を要し、私学の経営状態ではとても賄い切れなかったからである。しかし、同志社はこの困難を克服して遠く一八八七（明治二〇）年、京都看病婦学校ならびに同志社病院を開設している。慶応の医学部ができる三十年前のことである。更に一九一〇（明治二三）年にはこの稿の主題である私学最初の大的研究ならびに教育機関であった同志社ハリス理化学校を開設して黎明期の日本の科学に大きな貢

献をしているのである。事実、明治二〇年代の我が国の自然科学研究教育機関の双璧は、東の東京理科大学と西の同志社ハリス理化学校であった。京都大学が創立されたのは一八九七（明治三〇）年であって、ずっと後のことである。

一八九〇（明治二三）年の正月、大学募金活動最中、病に倒れて大磯の旅館百足屋に療養中の新島は、開校間近い同志社ハリス理化学校に思を馳せ、一月一〇日付で北垣国造京都府知事に書簡を送り、理化学校の構想、学科編成などを伝えている。一部を紹介しよう。

熊本県人ニして下村孝太郎と申者四年間米國ニ留学仕、一之有名なる理化専門校ニ於卒業仕候のみならず、米國屈指の大學トモ可称ジョンス・ホプキンス大學ニ而老年間実施之修業仕候而去臘帰國相成候次第（後略）

と述べている。下村は新島が将来理化学校の中心教授にすることを予定していた人物で、マサチューセッツ州ウースター工科大学を卒業し、さらにジョンス・ホプキンス大学の大学院でサッカリンの合成で有名なレムゼンの下で一年間有機化学の研究をしていたが、新

島の依頼で明治二二年に帰国して理化学校の開校準備に当たっていた。学科編成に関して新島は一切を下村に任せていたことがこの手紙でわかる。

生徒二段等を区分し、其奥蘊を究むる者と実地応用之生徒を着成致し度ものと被申、且京都ニ相開候専門校なれば何ことか直接府下之実業等ニ利益を及ぼし度ものと工風被致（後略）

これによると理化学校は理学的な基礎学科と工学的な応用学科が計画され、さらに京都という土地柄を考えて、先染工科、陶器科、冶金術などの学科の設立を考えている旨述べている。明治二七年の理化学校規則を見ると理化学部（化学兼理科、化学兼物理科、化学兼陶器科）と応用専門部（葉学科、陶器科）の二部と大学预科に相当する理科普通部が記されている。理化学校は実質上、化学を中心とした学校であった。この新島書簡には十三日後に天に召される人とは思えない気迫が行間に溢れていて、新島の理化学校設立に対する並々ならぬ情熱を読み取ることができる。「木はそれぞれその実でわかる」と聖書にある。新島の夢であった同志社ハリス理化学校

から如何なる人物が輩出したであろうか。理化学校は僅か七年という短期間で廃校の運命をたどり、卒業生も二二名という少数であった。しかしいづれも錚々たる人物を世に送っている。電気化学の加藤与五郎、分析化学と化学史の中瀬古六郎、遺伝学の三宅驥一、電気工学の鈴木達治などである。一九四三（昭和一八）年、太平洋戦争中理工系学部の実践という社会的要請もあって、同志社理工教育再興調査委員会が発足した。委員長には中瀬古六郎、委員には加藤与五郎、鈴木達也の名がある。当期中瀬古は七四歳の老齢であったが彼等委員の願は明治三〇年廃校以来絶えて久しい同志社に於ける理科系学部を再興して新島の夢を再現することであった。戦争中物資が極端に欠乏していた時であったから彼等の労苦は想像に余がある。しかし彼等の努力は報いられて一九四四年、同志社工業専門学校が設立されたのである。卒業生中是非あげたいのは加藤与五郎である。加藤は東京工業大学の教授、幾多の発明発見を行い日本のエダソンと謳われた人である。電気製品に不可欠の部品、フェライトは彼が発明したものである。加藤のもう一つの業績は創造科学教育

である。私費で軽井沢に創造科学研究所を創設（昭和三五年）夏季休暇中約一月間、後輩の同志社大学工学部学生六名、助言のため教官二名が参加して軽井沢ゼミが行われた。教師と学生が起居を共にして加藤から創造性を養う訓練を受けたのである。筆者も二度参加する光榮に浴したが、老先生の語られる言々句々は今でも不思議と耳に残っている。加藤は「創造は直感より生れ、直感力を養うには心がきれいである必要がある」と説いた。きれいな心とは既成観念に囚われず物事を正視する心であろうと私なりに解している。そして加藤与五郎も「裏の子」であり新島襄の夢を実現した人であると思うのである。

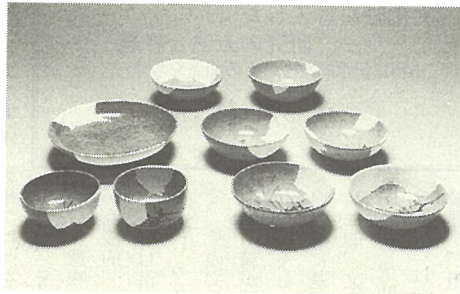
（大学工学部教授）

同志社校地出土の埋蔵文化財（19）

ひぜんさんきょうやきうつ
肥前産京焼写し碗・皿

鈴木 重治

（江戸時代）



新島会館地点 SK124他出土
右下、口径12 cm、器高6 cm

京都の伝統工芸の一つに京焼がある。中世六古窯の中に含まれる瀬戸窯の技法を基礎に、桃山時代に出現したとされている。考古学的にみると、京焼の歴史的發展過程を区分して、一期、二期、三期に分け、

楽焼の登場後、伊万里焼の出現期までを一期としている。仁清や乾山の活躍した時期が二期に相当し、色絵や陶器の全盛期である。

磁器の導入以後を三期としているが、これには、中国産の輸入磁器や伊万里焼の染付の影響が大きく左右している。伊万里焼をはじめとする肥前産の陶磁器と、京焼の關係はそれ以前から認められ、出土品によっても検証されている。つまり、出土品から磁器が登場する以前にすでに陶工の間には往來があり、技法上の交流や、商品化された製品を通して、互に影響し合っていることがわかる。とりわけ十七世紀後半の江戸時代前期から中期への過渡期の陶磁器が、そのことをよく物語っている。ここに示した新島会館地点の発掘調査の際、廃棄土坑の一つから大量に出土した肥前産の京焼写しの一群など、その好例である。「清水」の銘をもつ山水文の鉄絵の碗、皿は、伊万里市の御経石窯などで、当時の京焼を写して生産されたものである。

すでに、江戸時代からブランド品のコピーが出廻っていたことになる。

（同志社大学校地学術調査委員会調査主任）

女子教育と「男子教育」

落 合 恵美子

同志社女子大学に職を得て四年になる。この三月には着任した最初の年に教えた一回生が卒業式を迎える。ようやくたいの学生より古株になって少しは教師らしい貫禄も身につくかな、などと感慨に浸っている。

わたしは社会学や社会史が専門で、とりわけ家族や女性を研究対象にしているのだが、一番の研究の中心は「お産」である。なぜそんな風変わりなテーマを、などという話は長くなるのでさておくとして、先日保健室の方言われてびっくりしたことをまづご披露しよう。「先生、授業でお産の話をなさるんですってね。実は毎年そのときになると、保健室に駆け込んでくる学生がいるんですよ。お話

うかがっていて気持ちが悪くなったと言いついてね。」授業の成り行き上でてくる「陣痛」とか「出血」とか「会陰裂傷」とかの言葉を聞いているうち、気分が悪くなつてフーツと気が遠くなつたということらしい。

いくらなんでも講義のせいで保健室のお世話になるのでは困るので、それからはなるべく抑えて話すように気をつけているが、それにしてもお産の身体的過程の話を聞くときの学生たちの反応は、顔をしかめ、うつむき、頭をかかえ、大変なものだ。是非これだけは信じていただきたいのだけれど、わたしはエロ・グロ趣味で「痛み」や「血まみれ」を強調しているわけではない。子供を産んだ女性

なら「そうなのよね」と軽く受け流すくらい常識、お産のABCにふれているにすぎない。にもかかわらず学生たちがあれほど衝撃を受けるのは、すなわち、彼女たちがお産について完璧に無知であつたからだと言つてよいのではないかと思う。とうに生殖能力を備え、早ければ四、五年で出産を経験するかもしれない二〇歳過ぎの女性たちが、である。大学に入る前に性教育というものは受けてくる。しかし妊娠・出産の具体的過程まではなかなか教えてもらえない。そして彼女は無知のまま妊娠し、陣痛に襲われ、医者に会陰を無断で切られ、翻弄されるようにして赤ん坊を産み落とす。それからまた壊れもののようにな赤ん坊の扱いにとまどい、おっぱいの手入に悩み、しばしば育児ノイローゼ状態に陥る。

授業の失敗談のような話をわざわざ開陳したのは、ほかでもない、現代の女性たちが女性の人生についていかに無知なまま大人になるかという実態を知つていただきたかつたからである。現代の教育は基本的には大学まで含めた学校教育により与えられるが、学校教育の中で「人間」というときには残念ながら

暗黙に男性を想定しているものらしい。小学校の教科書に出てくる人物は男性の方が多いといったことに始まって、大学で教える諸質問の「人間」概念も抽象的ながら男性を範型としているのは近年よく指摘されるとおりである。

女子大で教えることになって「女子教育」とは何かなどということを考える機会がふえた。「女子だから留年させてはいけない」とかいうパターンリズムはもはや無用とは思うものの、かといって、これまで男子に対して行なってきたのとまったく同じ教育を女子にも与えればいいと言いつける気にもなれないのは、短い教職経験と自分の学生時代をふりかえって現在の学校教育・大学教育にこのような感想を抱いているからだと思う。

では「女性の人生」をいかに教えたらいいのか。お定まりの教科書があるわけではないので、授業は毎回試行錯誤にやるほかはない。例えばわたしは、ちよつとしたクイズを出すこともある。黒板に年齢別女子労働力率のグラフ（いわゆるM字型曲線）を描く。ただし「M字」をひとつ描くのではなくて、三〇代、四〇代、五〇代、六〇代と世代別に四本の形

の異なる「M字」を色分けして描くのがミソ。そしてどれがその世代のものか、学生たちに当てさせて、わたしも楽しむ。

M字の底が浅く（すなわち出産・育児期にも働き続けた女性が多く）比較的高い位置になだらかな曲線を横たえているのが、実は最も高齢の六〇代女性。五〇代、四〇代と若くなるにつれ、M字の底はどんどん深く切れ込んできたのだと正答を発表すると、ホーツという驚きの溜め息が漏れる。「女性」専業主婦」となるには、都市化が進みサラリーマン家庭が増えるという社会的条件が必要だったのに、「女は昔から主婦だった」という全く誤った世間常識が、学生たちにも深くしみついているのである。だから、結婚後も働くこと・働く母親になることに、そういう生き方を肯定するにせよ否定するにせよ、必要以上に身構える。

どういう生き方を選ぶのかはもちろん本人次第。「これからの女性はいくらなくっちゃね」なんてお節介を言う気はさらさら無いけれど、自分で判断する基礎となる知識はしっかりしたものにしておきたい。それが教師の責任だろうと思う。

それから、女性の人生の時代的・世代的变化についても、冷静に考慮できるようにさせてほしい。「M字」の底は、最低の四〇代から三〇代までの間に一挙に跳ね上がった。戦後三〇年続いたトレンドが、この一〇年で逆転したのである。今の学生たちは、そのお母さん世代と同じように生きようとしたって、出来っこない。周知のように結婚年齢も上昇した。いまや適齢期はクリスマス・ケーキじゃなくて正月のお餅なのよ、三〇、三一まだまだ売れる、お母さんが焦り始めたなら説明してあげましょうね、なんて冗談を言ったりしている。

ところで最近、共学大学の非常勤をするようになって、面白い経験をした。女性学の自主ゼミの助言役のようなことを頼まれたのだが、行ってみるとゼミ教室に集まっていた二〇数名のほとんどが男子学生だったのである。女子ばかりか男子が混ざっても二、三人かな、などという事前の予想はみごとにはずれた。いぶかしく思っている他の大学で同じような授業を受け持っている知人に聞いてまわったところ、この傾向は数年前からどこでも多かれ少なかれ見られるという。ではこの男子

学生たちは何を求めて女性学ゼミになど出てくるのか。

ゼミのコンパで飲みに行ったとき、いつも自嘲的にボルノなしには生きられない男の生理なんて話ばかりしている一男生が口を開いた。「男の浪人のつらさがわかりますか。女は適当な大学に入ればいい。でも男は限界なのにその限界を無理して押し上げてでも、いい大学に入らなくちゃ男になれない。まあ、俺は一番入りたかった学科には入れなかったから、結局男になれなかったんだけどね。それでかな、このゼミに来ようと思ったのは。」この発言を皮切りに、子供の頃エキスパンダー買ったとか少林寺拳法やったとかの打ち明け話が続出し、男の証明にみんなけっこう苦労してきたんだね、なんて盛り上がった。「いかに鎧を脱ぎ捨ててるかってことなんだよな。」この道では先輩格の男性が言った。

どうも女子教育ならぬ「男子教育」もありうるようだねと、その時わたしは思った。女性学に集まってくる若い男子学生たちは、女性のために女性を差別しない良い男性になるために来ているのではないらしい。自分のために、自分にとって気持ちのいいアイデンテ

ィティーのもち方を求めているというのが実情のようだ。一〇年前、一五年前にもこういう男性はいたが、ほんの少数派の変り者扱いされていたものだ。ところが今は、もちろん多数派になったとは到底言えないが、潜在的にはかなり広がっているのかもしれない。

同志社女子大学の一般教育の社会学の授業で、今年は雑誌に出てくる女性像・男性像の分析を実習テーマに選んだ。雑誌は時代の社会意識をそのまま反映するわけではないが、漠然とした意識に形を与えようとする成功や失敗の試みがながしかの世相を照らしだしてくる。それによると、八〇年代後半以来、男性像はたしかに大揺れに揺れている。同じようなイメージの実験は女性誌では七〇年代後半から八〇年代を通じてさかに行なわれたことを思い出すと、性別について深刻に悩むことになるのは、これからはむしろ男性の方なのかもしれない。なにしろ、「会社は永遠です」なんて言えた高度成長期日本の生き方は、今後到底続けられそうにはないのだから。

九〇年代の今まさに世に出ていくこうとして

いる学生に対し、たとえば国際政治の覇権交替についての世界システム論やモデルスキ理論を教えないまま卒業させるとしたら、海図も与えずに海に放り出すようなもので、いくらそれぞれの専門知識があったところで彼女または彼は時代の波間に沈んでいくしかないだろう。同じように、性別や家族についての規範が変動しつつあるのに、それをどう受けとめ対処していったらいいかという歴史的知識や見通しを与えないまま卒業させるのは、女子学生にとっても男子学生にとっても随分と残酷なことだと思う。学科によらず全ての学生にそうした海図を与え、自分で時代を泳ぎきる力を育てるのが一般教育ではないかと、わたしは思っている。今年度から女子大でも「女性と文化」と題する総合科目が始まった。価値観の押しつけではなく、個々人が自分で判断するための基礎を与えること、それをモットーにもうしばらく試行錯誤を続けてみたい。(女子大学一般教育専任講師 社会学)

同志社短歌会のこと

田中順一

京都の城南宮では毎年春秋二回曲水の宴という催しがありますが、私はそのたびに招かれて参加しております。京都歌人協会から男性五人、書家から女性二人、それぞれ烏帽子、狩衣と十二単の服装で、庭園を流れる遣水のほとりに着座、当日出された歌題によって即詠の歌を短冊にしたため、上流から流れてくる羽觴の上のさかずきの酒を頂くという趣向、やがて女のわらわが集めた短冊を、神官数人が古式にのっとり一首ずつ披露朗詠するのです。優雅といえば優雅な催しで、平安時代の大宮人になったような気分になるまではいいのですが、神官が「何々といえることを詠める」とまず題を述べ、次に作者一人々々

の姓名と歌を披露する時、例えば私の場合は「田中ノ順一」と名をいうのを聞くと、途端に在原ノ業平か藤原ノ定家になったような具合でくすぐったいし、「田中ノカカシ」と聞き違える人がいはいまいかと心配になってくるのです。その上神官が私たちを「歌びと」と言い、私たちの作った歌を「やまとうた」というのも大時代的で、現代では三十一音の短詩型は短歌といっているのに「やまとうた」とか「和歌」とかいうのは変に時代錯誤のように思われます。「やまとうた」というのは「かろうた」つまり漢詩に対する古い称で、「和歌」というのは長歌も短歌も含めたもので、ともに近代以前の言い方だったのが、明治中期以

後は「短歌」というのが一般になったのに、いまだに「和歌」などというのには抵抗を感じるのです。曲水の宴にかぎらず、世間では今の私達の作る短歌を和歌と言ったり、また歌人というと左手に短冊右手に筆を持っている姿を思い描いたりするのでからやり切れません。テレビドラマなどに俳優の扮する歌人というのが出ると、大抵そんな格好をして見せるのでいやになります。私はよく歌人といつて紹介される場合がありますが、これもしささか変な感じがして、ふざけて私は「その上にバをつけて下さい」と言ったりして茶化すのです。いや本当に馬鹿人なのかも知れませんが、とにかく世間の人の先入観とというのはなかなか改まらないようです。それからまた、私たちが短歌を作ったり歌の会を開いたりするのを聞いた人に「よいご趣味で」とか「なんとご風流なことだ」と言われると、現代短歌はそんな趣味や風流じゃなくて、もつと真剣な生活者としてのいとなみなんだと力んでみても、やはり世間ではそうは思わないようです。そうこうしているうちに、最近は俄万智ちゃんとかいう若い、といつてももうそんなに若くはないけれども、女性歌

人が出て来て、『サラダ記念日』という歌集がベストセラーになったとかいうと、すぐ若い模倣追隨者がワンサと出て、何とかが何とかしたから何とか記念日なんて歌を作って喜んでいるのですから、世間というものは全くおかしいのです。本当の短歌はそんな安直で軽薄なものではないと私は思っているのです。明治中期に与謝野鉄幹・晶子夫妻や正岡子規たちがそれまでの古い殻を破ってから、和歌という言い方は短歌というようになっただけでなく、それぞれ傾向は違っていても、次々とすぐれた作者が出て、近代から現代へと新しい歌の世界を切り開いて来たのですが、世間はそういうことには無関心で、歌といえは相変わらず百人一首に毛のはえたものというぐらいに思っている人が多いのですから残念至極です。明治末から現在まで継続している大結社としてのアララギの大御所ともいうべき土屋文明さんがついこの間百歳を越えて亡くなりましたが、あの人は風流韻事と言われそうな面をすっかり払拭して、短歌は広い意味での働く人同志の生活の真剣な声で、歌の会はその魂の交換の場だと言っておられました。私も現代の短歌はそういうものだと

思っております。

さて、私のことを言うのはおこがましくて恐縮ですが、若年の頃から作歌にとりつかれて、いまだに馬鹿のように作りつづけているのです。京都大学の学生時分に、その頃国文学科の主任教授だった吉澤義則氏を囲んで学生たちがはじめたハハキギという短歌会に属しましたが、氏の没後は同志社女子大学教授だった加藤順三氏が受けついだのを、またその亡きあとを私が引き継いで、もう三十数年になり、ちょうど去年が創刊六十周年に当たりますので、その記念行事をしたりしました。私は加藤氏のあと同志社女子大学に勤務するようになりましたが、教職のほかに短歌一筋に携って来しました。ちなみに女子大学図書館の前の芝生一隅に加藤氏の作られた二首の歌が碑になっていますが、そこには「同志社女子大学の生みの親なるデントン、星名ひさ両女史の記念碑に」として

海をこえ国をもこえて神のみ手にむすば
れしこの淑き人ふたり
世界のはなうつし植うべきこの苑をのこ
しおきたるよき人ふたり

という歌が刻まれてあります。氏は若いころ佐佐木信綱氏の竹柏短歌会に属し、さかんに作歌をつづけておられたのが中断、その後ハハキギ短歌会の責任者となられ、独特の風格のある作品は、戦前に『葦火』という歌集となり、昭和三十三年に第二歌集『なぐれ藻』を出されましたが、没後にその後の作品を集めて私が遺歌集として『なぐれ藻以後』を編集して発行しました。

ところで、同志社には昔池袋清風という方がおられ、幼時から香川景樹の桂園派の歌を学び、高崎正風とか鎌田正夫とかのいわゆる旧派とか御歌所派とかの有名歌人とも親交があり、同志社女学校の教師となりましたが、『案山子廻屋乃社』という結社を作り、歌集に『浅瀬の波』があります。その門からは多くの歌人が出ましたが、その中大西祝^{はなだ}という人は号を操山と称し、同志社に学び東京専門学校^{早稲田}のちの早稲田大学や京都大学で哲学を講じました。その歌は清風師の風を受けて桂園派적입니다。この人は鋭い歌論に特色があり、当時の明治歌壇を啓蒙するところがありました。大西祝全集があります。そんなわけで同志社には歌を作る人がなかったわけではあり

ませんが、その他に歌を作る人はあまりいなかったようです。

私は女子大学在職中、或る年学生たちに短歌を作って提出させ、それを添削の上ガリ版で印刷して配布したところ、皆喜んでくれましたが、その後は私の努力も足らず、長つづきせず残念でした。クラブとして学生たちが自主的に短歌会を作りかけたこともありましたが、これもいつか立ち消えになってしまいました。他の大学には、例えば京都大学・立命館大学・龍谷大学などには学生短歌会があるようですが、同志社にはなぜ育たないのでしょうか。

同志社女子大学に在職中、たまたま私が教職員組合の女子大学委員長だったころ、組合員のリクリエーションの一つとして、乞われるままに教職員学内短歌会を作り、毎月ゼームズ館二階の和室で、私の定年退職まで歌会を開いて来ました。およそ十人ほどでしたが、時には大和方面へ吟行などしやれた旅をしたこともあります。

最近、経済学部の新村豁通教授が女子大学日本文学科の安森敏隆教授と語られて、私に学内短歌会を興そうではないかという誘い

をかけて来られましたので、以前私たちの作っていた女子大学教職員短歌会の人たちをも含めて、場所も当時のままにゼームズ館二階の和室で、すでに数回か回を重ねて来ております。職員の方たちの仕事のあと夕方五時からですので、時間の制約もあり、それに仕事都合や会議があつたりして、いつも全員集合というわけには行きませんが、毎回十人前後の人が集まつて来ています。この会が将来どうなつてゆくかはまだわかりませんが、私自身はすでに退職者でもありますし、それに加えて老衰気味でもありますので、少々おぼつかないものです。歌会は各一二首ずつ前もって提出した作品を印刷してもらつておき、当日互評をするのですが、私が昔のよしみからふざけ散らしたりするものですから、もつとマジにやれという声がそのうち出るのではないかと反省しております。もちろんメンバーは皆アマチュア同志で、作品のなかには狂歌まがいのものもあつて大笑いすることがあるかと思えば、哲学論文の一節めいたものもあつたりして、アタマの廻転が追つかなくて閉口することもあり、この調子ではそのうちタンカを切るような勇ましい短歌も出てくるん

ではないかとハラハラしています。しかし中にはしみじみしたすばらしい秀歌もあります。このように今は混沌としているのですが、まあしばらく様子を見ることにしましょうか。短歌会にかぎらず同志社内には教職員のためのいろいろな楽しいサークルがたくさんあつたらなごやかな雰囲気生まれるのではないでしようか。無用の用というのも案外いいものだと思いますから。

（同志社女子大学元教授）

